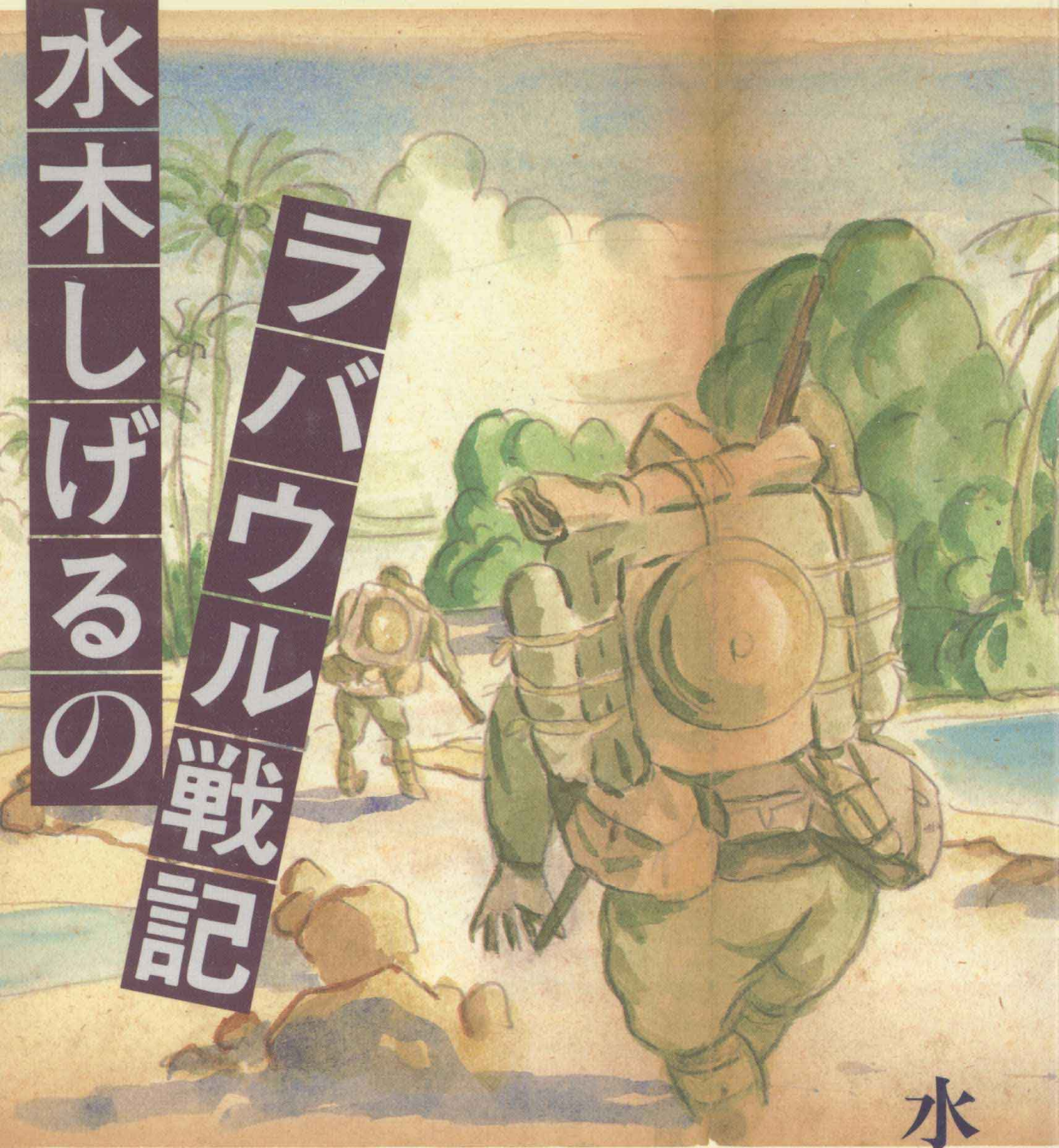


水木しげるの

ラバウル戦記



水木しげる

水木しげるの  
ラバウル戦記

水木しげる



水木しげるのラバウル戦記

一九九四年七月二十日 第一刷発行  
一九九五年七月十日 第三刷発行

著者 水木しげる

発行者 森本政彦

印刷 多田印刷

製本 鈴木製本所

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二ノ五ノ三  
振替〇〇一六〇一八一四一三三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。  
大宮市鶴引町21604 筑摩書房サービスセンター  
〒3331 TEL・048165110053

## 目次

はじめに	1
ラバウル戦記 その一	3
ラバウル戦記 その二	69
ラバウル戦記 その三	139
トーマの日々	167
ラバウルとの別れ	225
おわりに	227
アルバムより	229

## はじめに

この『ラバウル戦記』は三つの部分にわかれている。最初の部分の絵は、昭和二十四年から二十六年ごろに、発表するあてもなく描いた『ラバウル戦記』である。これは、後に書くような事情で中絶した。

そこで、ぼくのラバウル体験の続きの部分は、昭和六十年に出した『娘に語るお父さんの戦記・絵本版』（河出書房新社）のために描いた絵を収録した。

第三の部分は、終戦と同時に移動させられたトーマという所で描いたスケッチである。藁半紙に、鉛筆と慰問袋の中にあつたクレヨンを使って描いた。

戦後のぼくは、ラバウルから復員して国立相模原病院（昔の第三陸軍病院）に入院した。入院といってもポロアパートにいる感じだった。その間に武蔵野美術学校（その頃は造形美術学園とかいっていた）を受験した。

この学校に合格したものの、学校に入ったということになれば毎月授業料を納めなくてはならない。早速買ったのが米の買い出し、しかし取締りなんかあつて、あまりうまくゆかない。

それから、魚屋、リンタク、街頭募金とつづくわけだが、一年半アルバイトばかりで、学校には月に二、三回、即ち、授業料を払う時以外はほとんどゆかなかつた。つまりアルバイトが本業と化していたのだ。

これではいけないというので、魚屋を最後に吉祥寺に部屋を借り、学校にかよつた。

学校というのは時間があるから、家にかえると、この『戦記物』を毎日描いていた。

ところが三、四カ月たつて、どうも学費、いや食事すらままならぬ次第となり、学校をやめた。同時にこの『戦記物』もクライマックスのところまで中止のやむなきに至

るわけだ。即ち、モーレッツに働かないと、めしが食えなくなつたわけだ。

さて前置きが長くなつたが、この奇怪な戦記物の説明にうつる。

この物語は、内地からラバウルに出発するところから始まるが、その前に、鳥取連隊に半年近くいて、かなりなぐられているわけで、水木センセイの戦いは、この半年前に始まっているわけだ。

この物語は、いずれも、藁半紙に裏表を使用して、絵だけ描いたもので、説明がないと分かりにくいシロモノである。

しかも、説明する人はぼくしかいないときている。

筑摩書房の松田センセイにすすめられるままに、今回、書下しで解説することにした。

一九九四年一月

水木しげる

東が  
ハウル  
戦記  
その  
一

出  
陣





鳴らないラツパを毎日ふかさされるのに困った水木二等兵は、人事係の曹長に「やめさせてくれ」と直訴。「南方がいいか北方がいいか」といわれて、「南方です」といって、南方ゆきと相成ったものの、その頃（即ち昭和十八年の十一月頃）の南方戦線はニューギニヤをかなりやられ、ラバウルの近くのブーゲンビル島にも敵が上陸し、十一月には、ラバウルのあるニューブリテン島にも敵が上陸していた。ただ、タイヘンなどころらしいというところで何も知らない二等兵だから、ほがらかなものだった。しかし、なんとなく気味は悪かった。

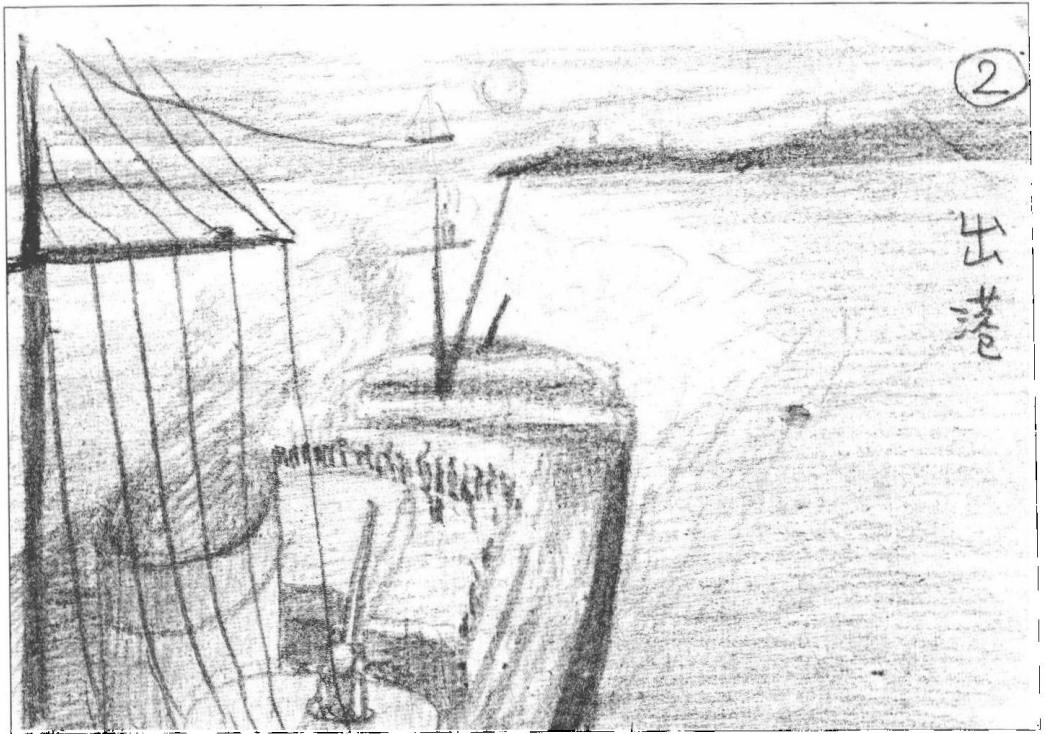




岐阜から汽車に乗せられたが、貨物かと思ったら客車だったので、すわって下関に着いた。下関から出港かと思ったら、なんと門司だった。どんな船だろうと思っていると、上等の船が二隻いた。当時の新造船で、鎌倉丸とか新田丸とかいう船だった。

「まさかあの船じゃないでしょう」と上等兵にきくと「バカ者つ、あんな上等の船に乗れるわけないよ」といわれ、そうだろうなア、と思っていると、上等兵どのの御意見とは違って「アレらしいよ」と指さされたのが上等な船なので、日本はまだ金持だなア、と思いつきながら胸をワクワクさせながら乗ったのだが……。

その頃は、日本をはなれて外地にゆくと、再び帰れないだろうという気持があるから、みな、なんとなくしみりして、物静かな感じだった。兵隊はたくさんいたが、みな沈黙がちだった。



②  
出港

船の中は、なんと人間の船室が三段になっている。即ち豚か山羊を輸送する仕掛けになっているのだ。

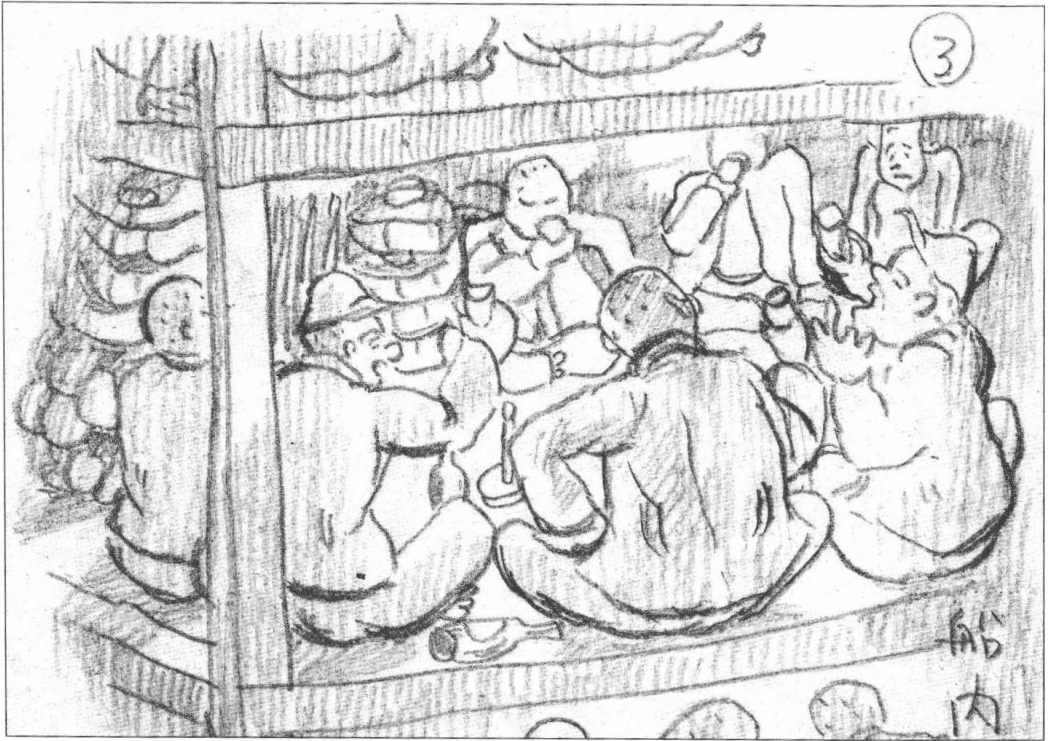
「我々の船室はもっと奥だろう」と思っていると、その三段のプタ輸送に似たそれが、我々のネグラときいて、一同おどろいたが、アフリカからアメリカにおくられた奴隷船よりはましだろうと思った。

というのは、足をのばせば寝られるのだ。なんとというありがたいことだろうと思っていると、出港。

「おいみんな、最後の内地だぞ、よくみておけ」という軍曹どのの半ばやけ気味のセリフを聞いて外に出てみると、夕方だった。

船は思ったよりも大きく、船尾と船首に高角砲をのせている。しかも、バカに速力がはやいのだ、即ち上等の船なのだ。

これでいよいよ永久に内地とはお別れかもしれないと、海をながめていると、「みんな船室に集まれ」という声。



酒の配給である。運んだり、分けたりするのはすべて初年兵の仕事、なにかの手違いでへマをすると、すぐにビンタがビビビのピンとくる。

なにしろ一室を三室にして三段になってるから、なんとなく息がつまりそうだった。

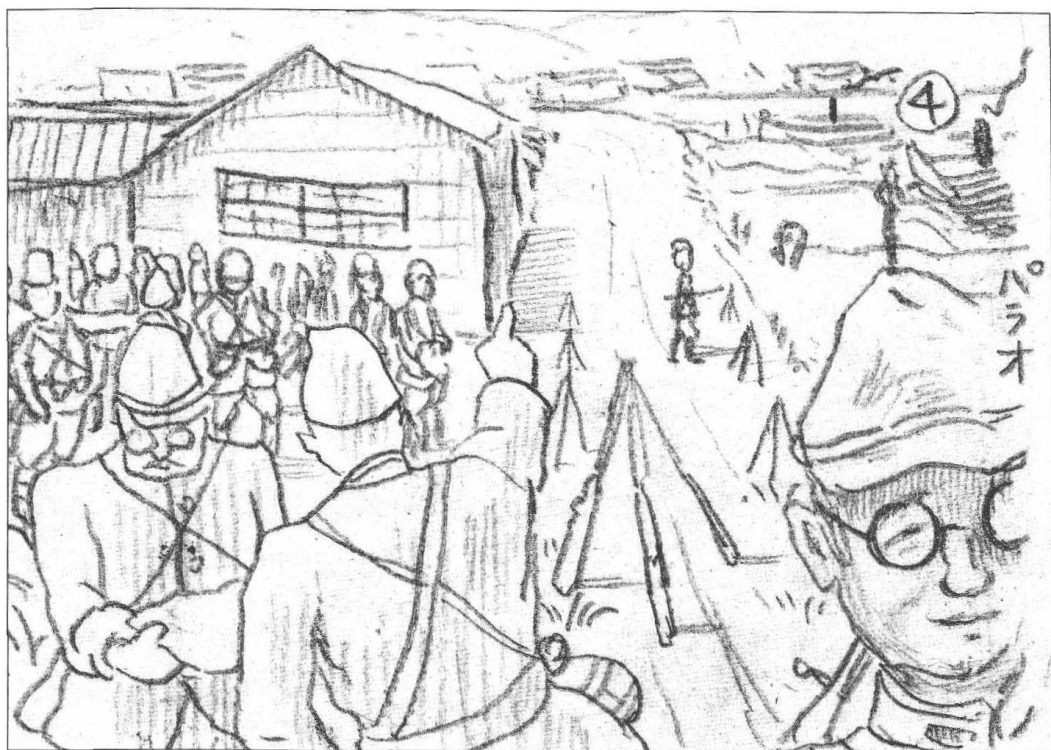
二、三日すると、船は南海に入ったらしく、波は和らぎ、きれいな鏡のような海になる。

右も左も南にも北にも入道雲があり、四方が水で、四方が入道雲という奇妙な景色におどろく。なるほど地球は丸いのだ。

船は、五、六日すると、なんとパラオに着いた。水も緑もきれいだ。

半日ばかりたって上陸ということになった。「なんだパラオか、ラバウルじゃなかったのか」とひとりごとをいうと、「初年兵のくせに、知ったふうなことぬかすなー」と意味もなく、ビンタが左右にサクレッツする。

「古兵殿、御注意ありがとうございます」そう思わなければいけないのだ。古兵の御命令は天皇陛下の御命令と同じなのだという、分かったような分からんような規則みたいなものがあるのだ。



小舟でコロールというところに上陸、南方のきれいな島々（パラオのあたりは特に小島が多い）をながめていると「その兵隊なにやってるんだ!!」という、景色と似つかわしくない怒声に、はっと我にかえると、みな上陸して、残るのは我一人。特に「軍人勅諭」の暗唱を命ぜられ、あげくのはては、ビンタさくれつ。（ありがとございませ。）

上陸したものの、手配がうまく行っていないらしく、六時間もぼんやりさせられた。

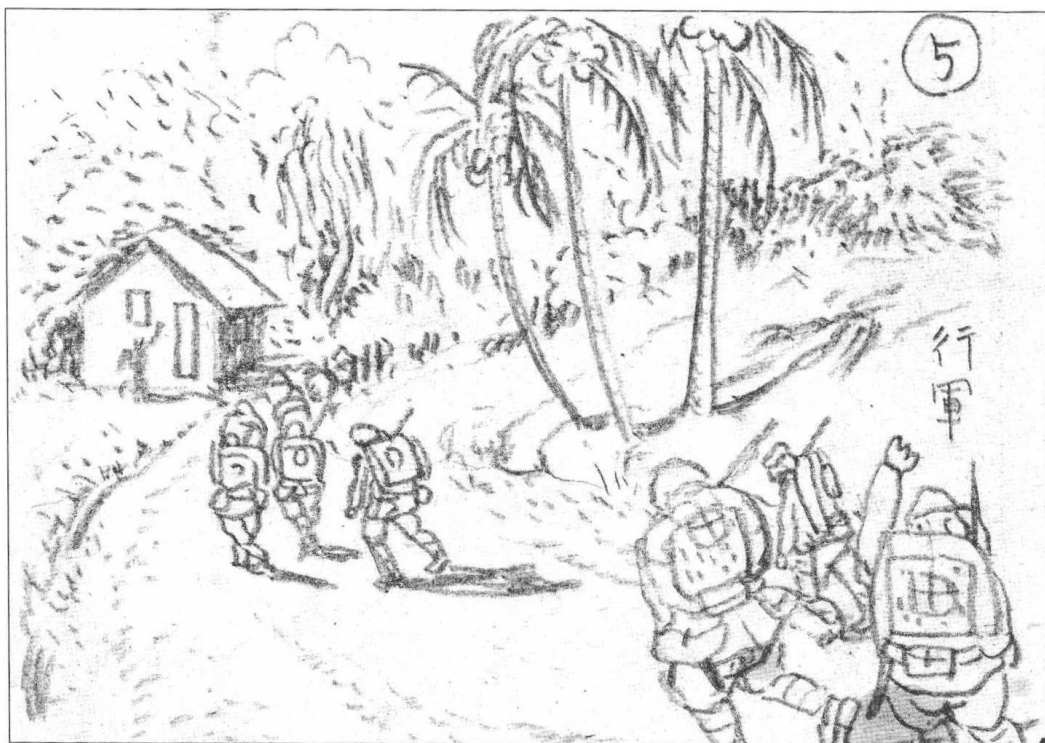
将校たちは、地図をながめたり、方向を指さしたり、走り廻ったりしている。

古兵のあたりにいると、なにかとうるさいので、小便にゆくふりをして歩き廻る。

やがて船がきて「コロールから本島にゆく」という。「なんだ本島があったのか」と、だまされた気になって歩き出すと、島にしてはバカに大きく、コロールほどきれいでない。ただの南の島という感じ。

5

行軍



モクモクと一日中歩かされた。船酔いのため、体のつかれている兵隊はバタバタとたおれた。それほど多くの数ではなかったが、たおれたあと、どうなるだろうと思つた。

あとで分かったことだが、そういう兵隊はトラックが積んでゆく仕組になっていたようだ。

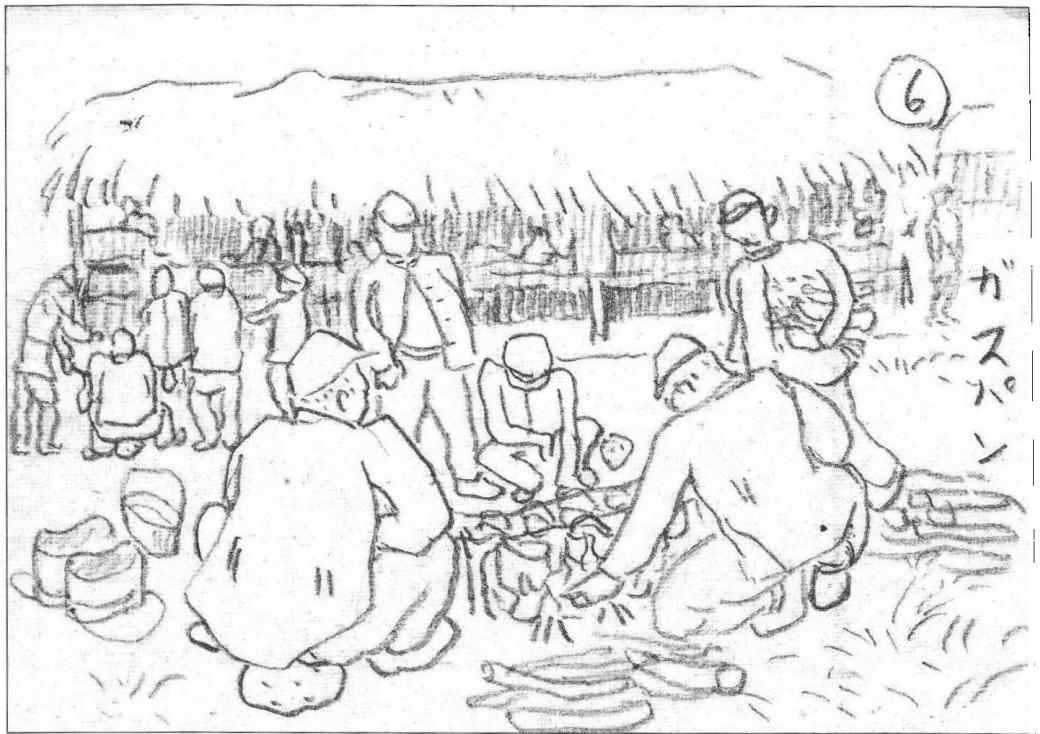
それなら、ぼくもたおれた方がよかつたと思つたが、あとのまつりで、八貫目(三十キロ)の背囊はいのうを背負つて歩いた。

どこにゆくのか、あとの位滞在するのかもしれない。分らない。

ただ、おくれたりすると、分隊長と称する鼻ひげを生やした兵長がいて、怒鳴る。時には、はげしいビンタ、即ち馬か牛のようにあつかわれるわけだ。

ぼくは、常に独自の行動が多すぎたから、いつも監視されてみたいで、ビンタも他の初年兵より群をぬいて多かつた。

無反省というやつだろう。一度注意されたことを何度もするからなぐられるわけだが、いわゆる「軍事」に無関心だったのだろう。



着いたのはガスパンというところだった。

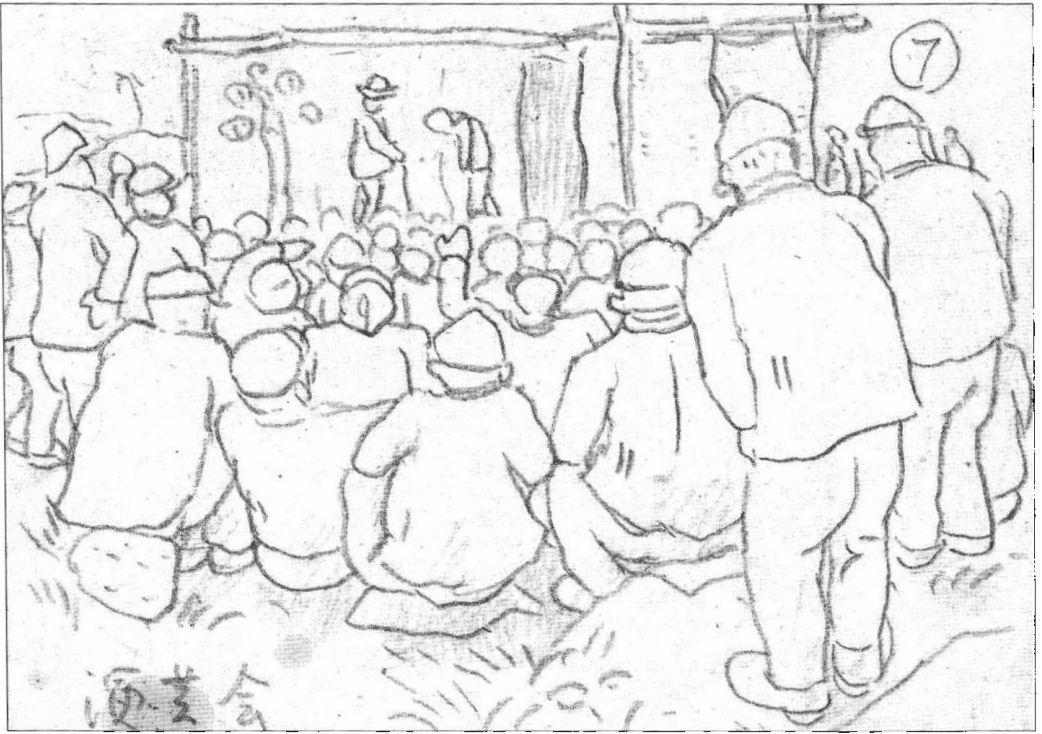
一分隊というと約十人いたが、その中に初年兵は五人いた。その五人で、古兵殿の食事の用意から食器洗い、下手すると禪よぎしの洗濯まで命ぜられる。

古兵殿は、カミサマみたいなもので、終日家の中で談笑にふけている。ぼくたちは、寝床の用意までやらされた上、おそいとか、下手だとか、難くせつけられて、毎日小言を頂戴し、運が悪いと特別になぐられる。

ある日、食器洗いに行つてかえつたら、他の初年兵は体操をやらされている。ぼくは、途中だからゆかなくてもいいだろうと解釈して、じっとしていた。

古兵の一人から「初年兵は、みんな集まって体操してるとんだから、おめえもゆかないとまずいぞ」といわれたが、ぼくは無視した。ゆけばよかったのだが、ゆくのが大儀だったのだ。

すると、分隊長が帰ってきて、ぼくだけが三分間ビンタをくらわされた。即ち「なまいきな初年兵だ」というわけだ。



馬小屋、いや豚小屋のような兵舎は、丘の上であり、水は谷間にあった。

何をするにも、いちいち谷間まで出むいてやらなければいけなかった。

「一体、何日、何か月ここでくらすのですか」ときいたが、誰も分からなかった。

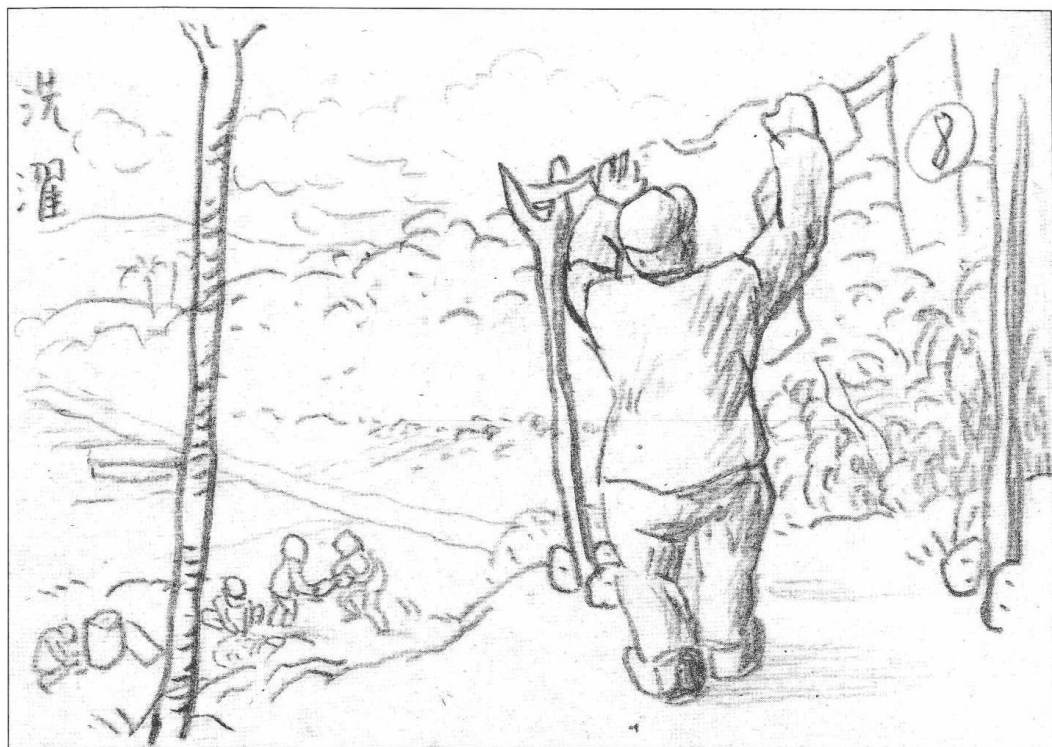
あまり滞在が長いので、兵隊がなまけ者になってしまふことを心配した指揮官は、「演習」をするといいい出した。

こんなところで演習なんかさせられたら、たまったものではなと思っていると、兵隊の気持が分かったか、トツジョとして演芸会が催された。

たしか部隊は一個大隊位だったから、六百人位だったろうか、その中に演技のうまい兵がこんなにいるかと思うほど、芸達者が多い。

一番人気があったのは、いつでも女の形をしたもので、「美人」が人気があったようだ。

兵隊たちは若いから、いつも「女」の話ばかりしていた。



毎日めしをたいしていると、附近に木がなくなり、遠出して木を集めることになった。

ほかの初年兵はマジメだから、木を二、三本引っぱってかえる。水木二等兵はいつも一本、従って「一体、おめえなにしているんだ」とビンタ。

おかずは乾燥野菜だけ、それも少量、従って肉がほしい。山の中になにかあるだろうということになり、山に入ったが、山には「かたつむり」しかない。しかもお化けみたいに大きい。一人コックの見習がいて「こりゃあ、エスカルゴいうてフランス料理では食べるんだ」という。

みんな木を集めてたき火をして、かたつむりのお化けを集めて火の中に入れてたが、誰一人食うものがない。へんなもの食って死んだらおしまいだからだ。

しかし勇敢な兵隊が一人いた、即ち水木二等兵である。いきなり、こんがりやけたお化けかたつむりを食い出して「こりゃあうまい」と言ったものだから、しまいには、とりあいになるほどみなかたつむりを食べ出した。あの時はたしか、六つか七つ大きなかたつむりを食べた。

水木二等兵は胃がいいからなんでも食べるのだ。





ドラム缶で風呂をわかし、まず小隊長、古兵どのの順番に入って頂き、初年兵が一番最後に入る。

その時、初年兵同士で、古兵の悪口をひとくさり。夜は寝かしてもらえるが、あまり長い間話しているとしかられる。

電気もランプもなにもないから、日が暮れると寝るしかない。

初年兵も二十歳位で同じ年ならいいが、中には三十三歳位なのもあり、たまに頭の禿げたのもいたから、そんなのが若い古兵にいじめられるのはザンコクな話だ。

分隊の中に、里見という同郷の初年兵がいて、三十三歳だった。三十三にしては、真面目な兵隊だったから、ビンタこそもらわなかったが、飯盒をぶら下げて洗いにゆくさまは、気の毒だった。

ぼくは二十歳で元気だったから、いくらビンタもらっても平気だった。即ちこりなかった。「塀の中の懲りない面々」という小説があるが、「懲りない兵隊」だったナ。あるいは「バカ」だったのかもしれない。